

楷書の書風に関する学生の文字認識

林 朝子*

「書道Ⅰ」の科目では、毛筆による楷書文字の実技と指導方法について取り上げ、授業を行っている。「楷書」といっても、そのスタイルには様々なものがあり、学生間にも好みの差が出ている。本稿では、教員志望者の多い学生たちがどのような書風を好むのかを調査した。その結果、学生自身が書きたい書風と小学生中学生の子どもたちに書かせたい書風には違いが見られた。学生が教員となった場合に、自らが書きたい書風と子どもたちに書いてもらいたい書風に違いがあることは、小学校中学校の書写での子どもたちへの指導方法に何らかの影響を与えるはずである。今後の教員養成課程における書写をも視野に入れた書道科目内容を見直すきっかけにもなるであろう。

キーワード：学生・子ども・楷書・書風・力強さ

はじめに

教員が持つ文字認識 — どのような文字を整っている・美しいとするのか — は子どもたちの書く文字にも大きく影響を与える。教員が意識せずに、自身が善しとする文字を書かせてしまう場合もある。しかし、筆者が担当した「小学校専門国語（書写）」科目で履修学生に「自分が書きたい文字」と「子どもに書いてほしい文字」について簡単な調査を行ったところ、両者のふさわしい文字に対する回答は一致しないものが多かった。「自分が書きたい文字」に対する回答は、「整っている文字」「美しく読みやすい文字」「大人っぽい文字」といったものが多く、また、「子どもに書いてほしい文字」への回答は、「元気な文字」「子どもらしい文字」といったものが多かった。

しかし、「整った、大人っぽい文字」と「子どもらしい元気な文字」とは実際にどのような文字なのかが具体的に示しにくい。そこで、今回は、楷書文字を学習する「書道Ⅰ」2008年度前期履修学生を対象に、代表的な中国の楷書法帖を基にし、学生が持つ文字認識について調査を行った。

1. 「書道Ⅰ」授業概要

この授業では、毛筆による楷書の実技面の向上を学習項目の中心におきながら、小学校中学校の書写授業での実践に結びつく指導方法の提示、中国古典の鑑賞も行っている。中学校国語免許取得のための必修科目であるため、履修生は国語教育コースの学生が最多ではあるが、免許取得に関係なく、他コースからの履修生も多くを占める。毎回の授業の流れは、基本的に、講義と実技であ

り、毎時の最後には課題提出を課する。15回の授業の内、前半7回の実技では手本として中学校書写の教科書の楷書部分を取り上げ、後半7回では中国古典「孔子廟堂碑」「九成宮禮泉銘」を手本とし、楷書の運筆を学習する。前年度の2007年度には中国古典の手本として更に「雁塔聖教序」も取り上げたが、時間的に3種の古典に触れ、運筆を十分に理解し習得することは困難であったため、本年度より2種に焦点を絞った。（各中国古典についての説明は後述する）

2. 調査方法

調査対象：2008年度前期科目「書道Ⅰ」履修生32名（教員養成課程の学生を主とする）

調査方法：履修生32名を対象にアンケート（選択・記述）調査を行った。

調査時期：7回目の授業時（2008年6月5日）に行った。前半の中学校書写教科書の内容に基づいた実技が終了し、中国古典の説明を行う前にアンケート調査を行った。大部分の学生が、アンケートで使用した中国古典に関する知識は持っておらず、アンケート時に中国古典を初めて見る者も多かった。

アンケート内容：

1 枚目) 中国古典の抜粋部分のコピー（「大」の文字と文字2行分）

- ① 虞世南「孔子廟堂碑」 ② 歐陽詢「九成宮禮泉銘」
③ 褚遂良「雁塔聖教序」 ④ 顔真卿「多宝塔碑」

2 枚目) 以下に質問内容を記す。

- ①～③ではどの書風が好きですか。好きな順に数字で書いてください。
- 1) で最初に好きな書風として選んだ理由は何ですか。
- ①～④ではどの書風が好きですか。好きな順に数字

*教育学部国語教育講座

で書いてください。

- 4) 3) で最後に選んだ書風はどのようにして最後になりましたか。理由は何ですか。
- 5) ④の書風についてどう思いますか。
- 6) ①～④であなたが書きたいと思う書風はどれですか。
- 7) ①～④であなたが小学生・中学生に書かせたいと思う書風はどれですか。
- 8) ①～④で一番書きやすそうな書風、書きにくそうな書風はそれぞれどれですか。

なお、今回のアンケートでは「書風」という表現を用いた。文字に関する字形だけではなく、線の太さ・点画の書き方・文字全体の雰囲気などを大きく含んだ観点から調査を行いたいと思い、「書風」を使用した。

3. 4種の中国古典

今回のアンケートで取り上げた4種の中国古典¹⁾の書風について簡単な説明をしておきたい。この4種は全て中国唐代(618-907)に書かれており、楷書の手本として典型とされるものである。

①虞世南「孔子廟堂碑」(以下、①「孔子」)

628-630頃。対向する縦画が膨らむように書かれており、字形は向勢が中心である。そのため非常に穏やか

な印象を与える書風である。「点画の間にゆとりをもたせた無理のない用筆で、運筆の呼吸を抑えて息長く、しかも神経のゆきとどいたこの穏和な書風は「君子蔵器」の風格を示す楷書の傑作である²⁾とあるように、一見優しく見えるが、内に秘めた強さがある書風である。

②欧阳詢「九成宮禮泉銘」(以下、②「九成」)

632。「楷法の極則」と称される究極の楷書手本である。主縦画は垂直に、主横画は右上がり書かれており、各点画にもあまり変化をつけずに運筆を行い、非常に細やかな神経で書かれている書風である。「どの字をとっても窮屈に感じさせないのは、不即不離(即かず離れず)に組み立てる字内の風通しのよさ³⁾にある。

③褚遂良「雁塔聖教序」(以下、③「雁塔」)

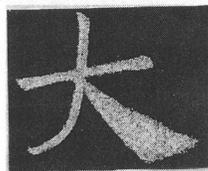
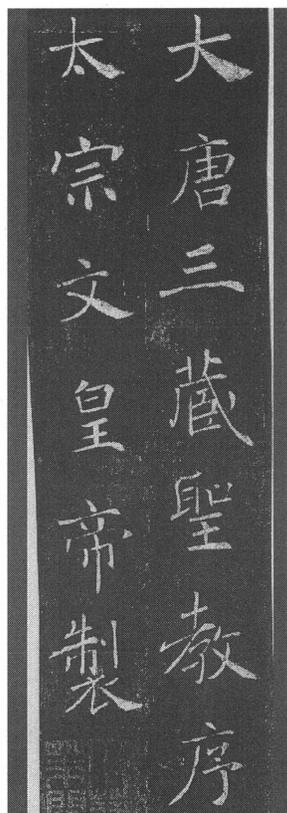
653。各点画は細い線を基本とし、「ソリとタワミ」⁴⁾が特徴的である。「筆鋒の抑揚を利かせ、緩急、肥瘦、強弱の織りなす多彩でしかも粘りのある強靱な線質、余白を大きくとりこんだ豊潤な風趣は、まさに变幻自在の表現⁵⁾である。



図①「孔子」⁴⁾



図②「九成」



図③「雁塔」



図④「多宝」

④顔真卿「多宝塔碑」(以下、④「多宝」)

752. ①～③より100年程後の作品である。顔真卿の「顔法」によって古法が一変され、新しい書風が現れたと称されたほど、非常に特徴のある書風である。横画は細く、縦画は太く書き、「点や画に丸みをつけて、ふくよかな感じ」⁷⁾である。骨太な文字であるが、力強さだけではなく、丸みがあるため、やわらかい包容力も感じられる書風である。

4. 調査結果と考察

(1) ①「孔子」②「九成」③「雁塔」④「多宝」で好きな書風はどれか。

質問は、①～③を対象にしたものと①～④を対象にしたものがある。①～③と①～③に④を加えて質問をすることで、「楷書の極則」とされる②「九成」と唐代において新書風とされた④「多宝」に対する学生の意識が明確になると考えたためである。

表1 好き・嫌いな「書風」

	①「孔子」	②「九成」	③「雁塔」	④「多宝」
①～③ 好き	7 (22)	22 (69)	3 (9)	
①～③ 嫌い	6 (19)	2 (6)	24 (75)	
①～④ 好き	3 (9)	9 (28)	4 (13)	16 (50)
①～④ 嫌い	6 (19)	3 (9)	23 (72)	0 (0)

()内は%

①～③の中では②「九成」を最も好んだものが多かった。その理由を以下に示す。

- ・字がかっこいい。
- ・全体的に整ったバランスだから。偏りが少ない。すっきりしていて読みやすい。
- ・一つ一つの字が整っているし、全体を見てもそろっているから。
- ・すっきりしていてインパクトもあるのでよいと思う。
- ・すっきりしているから。
- ・線がバシッとしていて書きやすそうだったし、きりっとしているから。
- ・すっきりしている。
- ・力強くて、かつ、まとまりがある気がする。筆遣いも巧妙な感じ。
- ・字のバランスや折れ具合が好き。
- ・一番すっきりしている印象を受けたから。
- ・文字ひとつひとつが整っているかどうか、見やすい

- かどうか。とめ・はねがしっかりでているかどうか。
- ・一本一本の線に迷いがなくて、見ていてすっきりとした印象がある。
- ・全体的にしっかりした字だが、線の太さや形に上品さがある気がしたから。
- ・形がかっこいいから。
- ・読みやすい。線がすっきりしている気がする。
- ・すっきりしている。バランスがとれている。
- ・今書いている形に近いから。
- ・大がすらっとしている。
- ・文字一つ一つと全体的なバランスが一番良いと思った。
- ・字のことはよくわからないので、ぱっと見の全体像で最も好きなものを選んだ。
- ・かくかくしているから。起筆がいい。
- ・線が太くなったり細くなったりするバランス。

②「九成」の書風を好む理由として目立つのは、「すっきりしている」であった。垂直に伸びる縦画が象徴しているように全体的に引き締まった書風であることから、このような感想が多かったのだろう。「すっきり」していることから、文字として「見やすい」「まとまりがある」「偏りが少ない」というコメントにもつながったと考えられる。しかし、④を選択肢に加えた①～④の中では、②「九成」を好んでいた者の中からも④「多宝」を選んだ者も多く、全体的に④「多宝」の書風を好む割合が非常に多くなる。④「多宝」の書風についてのコメントは以下のようなものである。

- ・かなり書体がしっかりしていて、力強さがすごく魅力的だなあと感じる。大きな点画なのにバランスもすばらしく、枠にはまっていない感じがすごく好みます。書家の自信の表れがにじみ出ているよう。
- ・太くて元気。堅い。なので男気を感じる。
- ・太い部分と細い部分の差がはっきりしていてバランスがよい。力の入れ方に強弱があって、それが伝わってくる感じ。ずっしり重い感じの字である。
- ・一本一本の線が豪快で気持ちよい。その中でも折れや払いが丁寧で、整って見える。
- ・普段毛筆で書くと、このようになると思う。
- ・力強くて好き。
- ・最も読みやすい。
- ・線が力強い感じ。
- ・一画一画がとても力強いと感じる。とても固いイメージを受けるが、全体的に安定感がある。
- ・力強い感じがする。
- ・今の書風とほとんど同じだと思う。力強くて、どっしりとしていて、私は字が太くなる傾向があるの

で、最も書きやすそうだと思う。

- 立派な字だなと思う。
- 力強くてよいと思う。線が他よりも太い。
- すごく太い、力強い、止めのところが下がっている。
- 太くて力強い感じとか、筆が①～③とは違うのかなと思った。今まで書いた強弱といちばん似ていると思う。
- 力強い。しっかりしている。点の押さえ方が強い。
- しっかり書かれている感じ。文字の勢いが伝わってくる。太く書くのは難しいかもしれないけど、面白そうだと思う。
- とめ・はらいがしっかり書けていると思う。文字の太さが全体的に太くなっている。
- 一本一本力強くて、堂々としている気がする。潔い気がして、気持ちがいい。すがすがしいように見える。
- メリハリがあって、縦の線は太く、横は細く、見やすいしはっきりしている。
- きれいな字だと思う。力強い感じ。
- 字がくっきりしていて読みやすい。力強い感じがする。
- 留め・払いがしっかりしているなど思った。
- 力強い。角がしっかりしている。
- 堂々と書いてあって、素敵だと思った。
- 何か堂々としている。
- 線の一つ一つが力強くバランスも良いと思う。
- いかつい。
- ①～③に比べてどっしりした感じがある。
- 現代っぽい。最後が下がっている。
- 寺に書いてある字っぽい。
- 縦の線が横の線とのバランス的に太すぎる。ごつい。

④「多宝」に対するコメントで多く目立ったのは、「力強い」という表現である。しかし、「力強さ」から感じるのは硬さではなく、「安定感」「どっしりした感じ」「堂々とした感じ」であり、非常に好ましい書風と考えている者が多い。

さらに、一つ一つの点画に注意を向けたコメントも多く、「縦の線は太く、横の線は細い」「一本一本の線が豪快」「折れや払いが丁寧」「止め・払いがしっかり」などが挙げられる。基本点画を十分に押さえて書かれている結果、「安定感」「堂々とした感じ」という好ましいコメントにつながったとも考えられる。

次に、多くの者が嫌いな書風として挙げた③「雁塔」について見ていきたい。75%前後の者が③「雁塔」を書風として好んではおらず、その理由は以下のようなものである。

- 線のバランスが特徴的すぎて少し苦手。傾いているのが気になる。特に払いの終筆が無理だった。黒板の板書みたい。
- 「大」の右払いの癖が強すぎる。
- 右に伸びすぎなのが少し好みに合わない。
- ①と反対の理由で、線の形や太さが一画一画个性的で、左に傾いているように感じた
- 字によって大きさが違ったり、一つの字の中でも強調されている部分が大きすぎるように感じた(教の左や大の払い)
- 太い線が難しそうだから。
- 「大」の左はらいの仕方が不自然に感じたことと、右払いが異様に太かったから。
- 弱々しい感じがするから。
- 何か好きではない。払いが流れてていや。
- 書きにくそうだし、不思議な印象を受けたから。線が今まで習ったものじゃなくて、流れたように書かれている。
- すごく独特に見える。他の書風とは払い・はね・止めが違う。細い線ばかりで書かれていて、少し大変そう。
- 払いの部分がとても目立つので、バランスがあまり好ましく思えなかった。
- 一つ一つはきれいに見えるけど、他の二つと比べるとあまり字のバランスがいいと思わないから。
- 線の太い細いが多くて難しそう。
- 字が个性的だから。あまり親しみのない書き方だから。
- 左右の払いがあまり対称でないから。
- 独特な感じ。力の加え方が難しそう。払いが特徴的。
- 大の右払いが太すぎると思った。
- 太すぎ。
- 文字の線の太さが所々で違って個人的にはバランスが悪いと思う。
- 細くて流れる感じがする。何かバランスも気持ち悪い。
- 字のバランスに違和感があった。
- 傾き方がいや。一画一画軽そうな印象。

目立った理由としては、「特徴的」「个性的」「独特」といった、書き手の個性が非常に大きく反映した書風をあまり好ましくないとしたものが多かった。また、文字が左に傾いているように見え、全体的に「バランスが悪い」と感じたコメントも多かった。実際に③「雁塔」の書風を書く場合を想定し、「書きやすい・書きにくい」を問う質問では、「書きやすい」の回答は0%で、29名(91%)が「書きにくい」書風として回答をしている。

「線の太さが所々で違っている」「流れているように書かれている」というコメントがあるように、学生が実際にこの書風を書こうとした場合には、非常に捕らえどころが難しく、どのように表現すればいいのか把握しにくい書風であろう。

(2) あなたが書きたい書風・小学生中学生に書かせたい書風はどれか。

学生自身が書きたいと思う書風と小中学生に書かせたい書風には違いが現れた。

表2 書きたい・書かせたい「書風」

	①「孔子」	②「九成」	③「雁塔」	④「多宝」
自身が書きたい	5 (16)	14 (44)	3 (9)	10 (31)
小中学生に書かせたい	3 (9)	6 (19)	0 (0)	23 (72)

() 内は%

学生自身が書きたい書風は②「九成」が多くを占め、小中学生に書かせたい書風は④「多宝」が大半を占める。自身が書きたい書風は②「九成」から感じるような「すっきり」している書風を好ましいと思う者が多い。一方、小中学生の書風としては、止め・払いなどの基本点画をしっかりと押さえ、「力強さ」を感じる④「多宝」の書風が好ましいと考える傾向がある。

整った書風であり、字形も向勢という点では、①「孔子」には④「多宝」との共通点が多い。しかし、自身・小中学生に対しても適した文字とする回答は少ない。これは、「力強さ」に評価の基準が置かれており、①「孔子」のように線の太さがほとんど一定で変化が少ない書風の場合、内に込められた強さは感じにくく、「弱さ」として感じ取られてしまうのであろう。

また、③「雁塔」は自身でも書きたいと思った割合は非常に低く、小中学生に書かせたいと考えた回答は無かった。このことは、③「雁塔」のように非常に「特徴的」「個性的」で、「流れたように」見え、バランスが取りにくいと感じる書風は、小中学生に提示する書風や小中学生が書くべき書風としては適切ではないとする考えを表しているのではないだろうか。

以上、将来、教員をめざす学生たちがどのような書風の文字を書きたいのか、また、小中学生にどのような書風の文字を書いてもらいたいと望んでいるのかをアンケート調査を基に示唆した。

おわりに

今回のアンケートで用いた中国古典4種は楷書手本の典型とされるものであるが、教員志望の学生自身が書きたい書風と彼らが小中学生に書いてもらいたいと思う書

風には大きな差異が生じた。これは彼らが将来的に教員になった場合に、どのような書風で小中学生に文字を提示していくのか、また、どのように文字指導を行っていくのか、という大きな課題へとつながる。さらに、このように学生自身が書きたい書風と小中学生に書いてもらいたい書風が異なる背景を踏まえた上で、教員養成課程における書写書道科目の内容についても考えていく必要がある。

今回は、中国古典の毛筆法帖を基にし、文字に関する字形・線の太さ・点画の書き方・文字全体の雰囲気などを大きく含む「書風」という点から調査と考察を行った。今後は硬筆文字をも含んだ上で、学生を対象にしたものだけでなく、小中学生や教員をも対象に文字認識に関する研究を進めていきたい。

注

- 1) 今回取り上げたのは、中国唐代(618-907)の作品である。唐代の中でも、初唐は極めて楷書に磨きがかかった時代である。皇帝である太宗自身が非常に書を楽しむ、多くの書名人を集め、書の向上に努めたことが大きく影響しているであろう。①虞世南・②欧陽詢・③褚遂良は「初唐の三大家」と呼ばれ、彼らによって楷書は完成されたと言われている。更に、④顔真卿を加えて、「唐の四大家」とも呼ばれ、今回取り上げた4種は楷書の手本として非常に尊ばれる書風である。
- 2) 西林昭一『書の文化史—中—』二玄社 pp.195 (1997)
- 3) 上掲書2) pp.197
- 4) 図①~④はそれぞれ二玄社発行の『中国法書選 31: 九成宮醴泉銘 [唐・欧陽詢/楷書]』『中国法書選 32: 孔子廟堂碑 [唐・虞世南/楷書]』『中国法書選 34: 雁塔聖教序 [唐・褚遂良/楷書]』『中国法書選 40: 多宝塔碑 [唐・顔真卿/楷書]』から作成。
- 5) 石川九揚編『書の宇宙 8— 屹立する帝国の書・初唐楷書—』二玄社 pp.56 (1997)
- 6) 上掲書2) pp.201、③「雁塔」の書風は非常に「変幻自在」であるため、授業時間内に履修生が「雁塔」の書風を運筆で実際に再現することは非常に難しいものであった。
- 7) 石橋鯉城「多宝塔碑の書法について」『中国書法ガイド 40: 多宝塔碑』二玄社 pp.29 (1988)

参考文献

- 當波ゆう子「教師と生徒の文字意識に関する一考察」『書写書道教育研究』第15号 pp.41-50 (2001)
 伏見沖敬『書の歴史(中国篇)』二玄社 (1960)